

秋田遠景近景

日銀秋田支店長コラム

1年で最も日が長いこの季節、早朝ジョギングは気持ちがいい。秋田市に住む自分にとって、雄物川沿いの堤防は格好のルートだ。風車を遠目に、朝の光を反射する川面を眺めると詩の国秋田を実感する。その際よく渡る雄物新橋は、近くの秋田大橋や雄物大橋に比べて交通量も少なく歩道も完全に分離されているため、ランナーにとつてはありがたい造りになっている。

しかしながら、先日県議会に対して、その雄物新橋を含む橋梁や道路に関して、廃止や維持管理レベル引き下げの提案が行われたと大きなニュースになっている。全県単位では全国でも初めての試みとみられるため、議員の方々からも、住民への丁寧な説明を求める声や、管理レベルの引き下げが鳥獣を引き寄せないか不安視する声が上がったという。

日頃から住民の意見をよく

インフラ見直し

んでいる県議の皆さんの指摘はもつとものだ。これまで存在するのが当たり前だと思っていた道路や橋が、廃止または管理水準を下げると言われると、本当に熟慮した結果なのかと聞き返したくなるのも自然な反応だろう。

それでも、高度成長期に集中的に整備された道路や橋、トンネルや下水道といったインフラの中には、建設後50年を超えて老朽化が進んでいるものも多く、しかもその割合は今後ますます高まっていく一方だ。人口減少が本県だけの問題ではなく、中、その在り方を全国に先んじて検討し、財政的にも維持が難しい対象について見直しを行うのはやむを得ない措置に思

合意形成し課題解決を

ます高まっていく一方だ。人口減少が本県だけの問題ではなく、中、その在り方を全国に先んじて検討し、財政的にも維持が難しい対象について見直しを行うのはやむを得ない措置に思



が、維持管理が難しい対象を整理縮小し、必要不可欠なインフラには更新のための投資を行っていく、いわゆるスマートシュリンクの実施に向けては、課題解決先進県になる潜在力を秘めている。

先般の国勢調査で、東京都と沖縄県以外は人口減少が明らかになり、インフラ問題は、他の都道府県にとっても避けて通れない課題であることは明らかだ。県議会に提出された資料はほぼ同時にインターネットを通じて公開され、誰でもアクセス可能となっている。それに、県や市町村の議会は傍聴可能であり、ライブ中継される場合もある。

透明性の高い議論を通じて、丁寧に住民の合意を探り、その上でインフラの縮小という困難な課題にどのように道筋を付けていくのか、本県の試みは他の都道府県にとっても非常に参考になるだろう。個人的にも非常に注目してこの問題の推移を見守っていきたいと考えている。

（種村知樹・日本銀行秋田支店長）

数字を確認してみよう。秋田県全体で、国や県、市町村が管理する道路の総延長は約2万4千キロある。これは全都道府県でちょうど中位（第24位）に相当する。橋梁の数は約1万2500本で、こちらは30位程度のようだ。今回廃止対象に挙げた

道路約181キロと10橋梁がごく一部であることが分かる。とはいえ、日常生活の中でこれらの道路や橋を利用している住民にとって不利益な変更になるのは間違いない。また、この検討がアリの一穴となつて、今後さまざまなケースで、廃止ありきの議論が止まらなくなるかもしれない、との懸念もあるだろう。多くの公共施設が老朽化や利用者数減少で廃止が打ち出されているため、道路や橋といった最も基礎的なインフラにも

人口が増えていた時代であっても、インフラ整備は無制限に行われたわけではなく、それぞれに必要性を吟味し予算の裏付けがあつて実施されてきたはずだ。それでも、人口が減る現在に比べれば、将来的な必要性や維持管理費用を十分踏まえて建設されていたのかは疑問に思えるものも少なくない。私自身も鹿角島という地方出身であるため、首都圏出身の某政治家に「地方にはね、まさに夜中には

道路約181キロと10橋梁がごく一部であることが分かる。とはいえ、日常生活の中でこれらの道路や橋を利用している住民にとって不利益な変更になるのは間違いない。また、この検討がアリの一穴となつて、今後さまざまなケースで、廃止ありきの議論が止まらなくなるかもしれない、との懸念もあるだろう。多くの公共施設が老朽化や利用者数減少で廃止が打ち出されているため、道路や橋といった最も基礎的なインフラにも

〈随時掲載〉